

「農業には夢がある！」 未来への挑戦を通じて農業と能登の発展に貢献する 株式会社 ゆめうらら

調査研究部 主任研究員 藤 貴伸

概要

所在地 石川県羽咋郡志賀町仏木力の2番地
代表者 代表取締役 裏 貴大
設立 2012(平成24)年3月
資本金 8000千円
従業員数 6人(2023年9月現在)
事業内容 農産物の生産・販売



ゆめうららは石川県志賀町にて米の生産を行う企業である。「農業には夢がある！」が代表・裏貴大氏のモットー。その言葉のとおり、能登の酒蔵・数馬酒造とのパートナーシップによる酒米の生産・供給、能登の農業や日本酒業界を盛り上げるプロジェクトの実施、ICTを活用した少人数での効率的な農業など、さまざまな挑戦を行い、注目を集めている。

今回は裏氏が農業を始めたきっかけや、前述のさまざまな取り組みについて、そして2024年元日の能登半島地震を経ての心境の変化や、今後の展望などについて話を伺った。

東日本大震災をきっかけに 「食に携わる仕事」へ

志賀町に生まれた代表の裏氏は、「能登半島初の甲子園出場」を目標に高校時代は野球に熱中し、ピッチャーとして活躍したが、最後の県大会では惜しくもベスト8に終わった。大学進学後も野球を続けたが、2年生の冬に肩を故障し、選手生命を絶たれてしまう。しかし、「今後は裏方としてチームに貢献したい」と学生コーチを志願し、練習の補助や、監督と選手の橋渡し、選手のメンタルケアにいたるまでを一手に引き受けた。大学卒業後は石川県にUターンし、農業者向けの保険を扱う共済組合に就職し、日々の業務をこなす毎日を送っていた。

転機となったのが、2011年3月11日に発生した東日本大震災である。震災後、東京では食料が品薄になり、学生時代の仲間たちから「食べ物を

送ってほしい」と助けを求める声が届いた。その経験から裏氏は「食に携わる仕事をすれば、関わった人を助けられる」と考えるようになった。食料を自ら作れば、有事の際に家族や地域の人たち、かつての仲間たちを飢えさせずに済む。そう考えた裏氏は農業を生業にすることを決めたが、家族からは「農業は儲からない。せっかく安定した職業に就いたのにもったいない」と猛反対されたという。しかし裏氏の決意は固く、家族の反対を押し切り、家族や親戚らが所有する約4ヘクタールの農地から米づくりを始めた。

酒蔵とパートナーシップを 結び、酒米を供給

裏氏が米づくりを始めた当時、すでに主食用米の国内需要は減少が続けていた。そのペースは年間8～10万トン。これは石川県で1年間に作られる米の総量に匹敵する。米で利益を出していくためには、主食用以外の需要を取りにいく必要がある。そう考えた裏氏が着目したのが日本酒の原料となる酒米だった。

酒米の生産を検討するなかで、能登の酒蔵・数馬酒造の代表を高校時代からの友人である数馬嘉一郎氏が務めていることを知った裏氏は、酒米の生産について相談すべく数馬酒造を訪ねた。当時、先代から経営を引き継いで「世界一若い蔵元の社長」として注目を集めていた数馬氏に、農業を始めた経緯や思いを話したところ、数馬氏から「酒米を作ってほしい」と依頼を受けた。当時、数馬酒造では原料となる酒米を富山から仕入

れていた。酒米も含めて能登のもので作ってこそ地酒と呼べるのではないか、そう考えた数馬氏は能登で酒米を作ってくれる農業者を求めていたのだ。

しかし、酒米は主食用米と比べ倒伏しやすく病害虫に弱いため栽培が難しい。そこで裏氏は、農業試験場をはじめ各機関に駆け込み、技術の習得や人脈の構築、情報収集などに奔走し、試行錯誤しながら酒米の生産に取り組んだ。「素人が何をやっているのか」と周囲からは冷ややかな目で見られていたが、初めて出来た酒米を等級検査に出したところ、6段階中、上から2番目の「特級」の評価を得た。米づくりを始めたばかりの農業者が獲得するのは並大抵のことではない。



ICTを活用して少人数で 高効率な農業に取り組む

確かな品質の酒米を提供することで数馬酒造からの信頼を得た結果、数馬酒造からゆめうららの酒米のオーダーは年々拡大。また、裏氏が本気で農業に取り組む姿勢を見たことで、ゆめうららに農地を預けたいと考える人も増え、同社の経営規模は急速に拡大していった。その中で、同社は少人数で効率的に農業を行うにはどうしたらよいかと考え、ICTを積極的に活用することで、農業の技術革新に取り組んできた。

例えば、圃場整備にはコマツとの連携によりICTブルドーザーを活用。一般的に能登は狭小・不整形な農地が多く、大規模化が難しいと言われているが、ブルドーザーで複数の農地を隔てている畦を取り払い、一面の農地とするなど、フィールドデザインを自ら行うことで、作業の効率を高めている。またドローンも、メーカーと連携し現



ゆめうらら 裏貴大氏(左)と数馬酒造 数馬嘉一郎氏(右)

場でのデータや農業者の視点からのアイデアを提供するなど、開発に携わってきた。ドローンはスマートフォン一つで操作でき、音も大きくないため、肥料の夜間散布も可能となった。

そのほか、直進キープ機能を備えた田植え機は、まだ機械に不慣れな若手でもストレスなく安心して操作できる。収量データが収集できるコンバインは、圃場でとれる米の収量と水分が把握でき、収量の良し悪しをデータから分析することができるほか、米を納める際に水分量などのデータを付すことで、最適な時期に刈り取りを行ったことを客観的に示すことや、米をどの圃場で収穫したのかをトレースすることもできるなど、導入のメリットは非常に大きかったという。



数馬酒造と共同で 「N-project」を実施

数馬酒造とは、単に酒米を作り納めるだけの関係ではなく、能登の農業や日本酒を盛り上げるため「N-project」にともに取り組む大事なパートナーでもある。N-projectとは、「こんな日本酒だったら買いたい、飲みたい」という日本酒を学生たち自身でプロデュースしていくプロジェクトである。原料となる酒米の栽培から、マーケティング、日本酒の味の決定、パッケージのデザインなど、原料の生産から日本酒として販売するに至るまでのすべての工程を学生たちが担い、裏氏と数馬氏は随時彼らのサポートを行う。学生たちが開墾した地域の耕作放棄地で酒米が栽培される。そのため、同プロジェクトは「耕作放棄地の増加」という農業側の課題、「若者の日本酒離れ」による需要の縮小という日本酒業界側の課題の両方に貢献するものとなっている。ちなみに「N-project」という名前には、能登・農業・日本酒の3つの「N」を盛り上げていきたいとい



N-projectメンバーによる田植え風景



N-projectの日本酒を谷本前石川県知事に披露 ゆめうららHPより

う思いが込められている。

プロジェクトに参加する学生たちは面接による選考があり、予算を使う際にもその費用対効果について細かく問われるなど、その取り組みはかなり厳しいため、同プロジェクトには覚悟のある学生のみが集まっている。

このプロジェクトはこれまで10年近くの間活動が続いている。プロジェクトの卒業生たちには、公務員として能登で働く者や酒蔵・酒造メーカーに就職した者、地元でワイナリーを起業した者などもおり、プロジェクトで得た経験を活かし、それぞれが自分のやりたいことを見つけ活躍している。



環境に配慮して作られた酒米の価値

ピッチャーとして甲子園を目指して野球に打ち込んできた裏氏だが、数馬酒造とのパートナーシップの中で酒米づくりに取り組む今は、「ピッチャーではなくキャッチャーになった感覚」だという。ピッチャーが打たれてしまったら打者を押さえる適切なサインを出さなかったキャッチャーの責任になるように、数馬酒造の日本酒が売れなくなったら原材料を納入したゆめうららの責任も問われることになる。裏氏は従業員に常にそう言い聞かせている。

そのため、米の付加価値向上にも絶えず取り組んでいる。近年進めているのが環境に配慮した米づくりだ。同社ではGAP（農業生産工程管理）認証を取得しているほか、マイクロプラスチックの海洋流出につながるプラスチックコーティングの肥料の代わりにプラスチック不使用のペースト肥料を利用している。1反の農地に通常の肥料を使

用すると、ペットボトル十数本分に相当するマイクロプラスチックが発生するが、ペースト肥料ではそれが発生しない。

数馬酒造では日本酒の輸出も行っており、昨年は世界的なワインの品評会であるInternational Wine Challengeのスパークリング部門において最高賞を受賞するなど、国際的に注目が高まっている。日本と比べ環境への意識が高い欧州では、味の優劣以外にも「環境に配慮して作られた酒米で仕込まれた酒」であることの価値がとても大きい。



次に目指すのは「石川発の品種」による酒造り

2020年、数馬酒造が酒米の100%能登産を達成したことで、「能登産の酒米ですべての日本酒を作りたい」という、ゆめうららと数馬酒造の当初の目標は達せられた。そこで、両者は次の目標に向けて取り組みを開始した。

次に目指すのは「石川県で開発された品種の酒米による酒造り」だ。能登産の酒米によって醸された酒が国内外で高く評価され、日本酒消費の拡大に貢献した。そこで、次は農業に対してもっと貢献が出来ないか、石川県で開発された酒米の品種で良い酒を作ることによって石川県の農業のさらなる発展に貢献できるのではないかと考えたのだ。そこで、ゆめうららでは山田錦に代わる酒米である「百万石乃白」や日本酒を仕込む際に掛米として用いられる「ゆめみづほ」など、日本酒の原料となる石川県産の品種の作付面積を拡大している。

次の課題は「五百万石」に代わる品種である。大吟醸を仕込むのに向く山田錦に対して、純米酒などを仕込むにはすっきりした味わいが特徴



石川酒30号の栽培風景

の「五百万石」が向いている。酒づくりを行う際は両者を使い分ける必要があるが、五百万石に代わる石川県産の品種が存在していなかった。そこで、かつて「ポスト五百万石」として開発されたが世に出ることがなかった品種「石川酒30号」を、保管庫に残っていた種子から復活させようと、ゆめうらら、数馬酒造に、酒のオンラインストア「KURAND」を加えた三者で共同プロジェクトを開始した。プロジェクトは始まったばかりだが、石川県産の酒米を原料に能登で醸した酒が世界の品評会を席巻する、そんな日がそう遠くない未来に訪れるかもしれない。



震災からの復旧と心境の変化

2024年元日に発生した能登半島地震により、能登地域では甚大な被害が発生した。ゆめうららでは農地の一部にひび割れなどが発生したが、幸いにも事業継続が危ぶまれるほどの大きな被害はなかった。パートナーである数馬酒造では設備の一部が損壊し、醸造停止を余儀なくされたが、県内外の酒蔵から委託醸造の申し出もあり、なんとか販売開始の目処が立った。ゆめうららにも前年と変わらない量の酒米の発注があったという。

これを受けて、ゆめうららでも早速今年の田植えに向けて動き始めた。特に農地のひび割れには早急に対応する必要があった。ひびを補修せずに田に水を入れると地すべりなどの二次災害が発生するおそれがあるためだ。そこで活躍したのが、ICTブルドーザーだった。これはコマツが開発したもので、ICTを活用して地割れの箇所を発見し、自動的に地割れを修復しながら進むブルドーザーで、同社とコマツで実証実験を行っているものだ。ICTの活用による被災地の早期復旧の先進事例として、今後災害が発生した際には他の農業者にとって参考となることだろう。

復興に向けて歩み始めたゆめうららだが、震災を経験した今の思いをたずねたところ、裏氏は「悔しい思いが残った」と語った。東日本大震災をきっかけに、食に携わる仕事がしたいと思って米づくりを始めたが、いざ目の前で災害が発生すると「農業者としては何の役にも立てなかった」という。災害時にまず必要なのは水と食料とライフラインであり、目の前で起こった災害に対して農業者として直ちに貢献できることは多くなかった。



ICTブルドーザーによる圃場整備

(出所) 公益財団法人いしかわ農業総合支援機構
「新しい農業をひらく 概要編」

しかし、震災を経たことで考え方に変化があった。避難生活が長期化する中で問題になったのが野菜不足だ。菓子パンやカップラーメンなどの食事が続き、野菜不足により便秘などに悩む人が増えた。これまでも、米より儲かるという理由から野菜の栽培を勧められることは多かったが、裏氏は「儲けのためだけに野菜をつくる気にはなれなかった」という。しかし、震災を経た今、野菜づくりへの挑戦も考えるようになったそうだ。



地域一帯の農業を請け負う覚悟をもつ

震災により特に大きな被害を受けた奥能登地域では、やむなく離農という選択をした人も少なくない。奥能登4市町では今春の米の作付面積が震災前の6割にとどまるとの報道もある。ゆめうららの周辺地域では奥能登地域と比べ被害は限定的で、今のところ離農者の大量発生は現実になっていないが、震災により地域の過疎化が加速する中、今後は離農を選択する人が増えていくことは間違いないだろう。

離農が進むことで懸念されるのは、耕作放棄地の増加と農地の荒廃、それらが地域の衰退につながることだが、もしその農地を預けてもらえるなら、ゆめうららがそこで米づくりを継続していきたいと考えている。地域を代表する農業者として、農業をリタイアする人の受け皿となり、地域の農業を守っていく。その覚悟が裏氏にはある。

震災以前から興味深い取り組みで注目を集めていたゆめうらら。今後、震災を経てどのように変化していくのか、能登の農業をどう盛り上げていくのか、地域の復興にどう貢献していくのか。裏氏の今後の活動が非常に楽しみだ。